

■ フォト・エッセイ ■

# 明暗を分ける歴史遺産 ——西スマトラのブキツ・ティンギ——

写真文  
大津伸子  
Nobuko Otsu



パノラマ公園内の史跡「ロバン・ジュパン」入口のレリーフ

西スマトラのブキツ・ティンギに「明」と「暗」の印象を与える二つの歴史遺産がある。ひとつは街の中心に天高く立つジャム・ガダン（ミナンガバウ語で大時計の意）と呼ばれる大時計台。もうひとつはシアノック峡谷に臨むロバン・ジュパン（日本の穴の意）と呼ばれる日本軍が一九四二年に三カ月で築造したとされる地下壕。

一七年前高原の町ブキツ・ティンギを観光で訪れた。雄大なシアノック峡谷を眺めていると、ここから峡谷へ通じる地下トンネルがあるとガイドに誘われ、行くと大穴の入口があった。見取り図から地下壕と察した。入口左側壁面に目をやった瞬間、衝撃を受けた。それは日本軍指揮の強制労働による壕築造を描写するレリーフだった。「何千人もの人々が無理やり働かせられ、死んだ」と語るガイドの説明に気色が悪く、暗い中に入る気になれなかった。

二〇〇八年六月再訪のチャンスが到来。パダンでのスマトラ国際旅行博参加後、車で二時間のブキツ・ティンギに向った。赤道直下に位置するが、海拔九〇〇メートルにあるため冷涼な土地だ。一八二五年オランダ植民地政府は陣営としてコック要塞を築き、第一次世界大戦時には防衛地として使用した。その後第二次世界大戦時の一九四二年～四五年にかけて日本軍がこの地を占領し、駐留した歴史がある。

シアノック峡谷展望台一帯はパノラマ公園に整備されていた。地下壕へ行くと、壁



天にそびえるジャム・ガダン(大時計台)

面のレリーフは影も形も無かった。一三二段の石段を下ると地下四〇メートルに至る。かなり天井の高い通路が東西二二メートル、南北一九六メートルに延び、壁で仕切られた幾つもの部屋が連なる。すでに蛍光灯が取り付けられた壕内を自称ガイドの若者の案内で回る。各部室は地質展示室、絵画・写真展示室、映写室、カフェ、休憩所、トイレなどの案内板が掛かるが、未整備だった。二〇〇七年の西スマトラ地震でシアノック峡谷は所々崩落したが、この壕はびくともしなかった。「日本軍の過酷な強制労働で死んだ者はこの風穴から捨てられた」、「壕完成後、機密保持のため殺された」といかにも興味を引くように雄弁に語る。消えたレリーフを問うと「描写があまりにも悲惨なので、日本政府が恥ずかしいので外された」と返された。

真相はどうか、確かめようと翌朝市観光局を訪ねた。当初珍客に当惑していたが、事情を話すとこの件に関与した職員を呼んでくれた。「二〇〇四年レリーフを覆うよう日本政府の要請があり、覆ったが、二〇〇七年六月の地震でレリーフが落ちたので取り外した」と説明し、小冊子のコピーを渡された。この記述によると、一九八六年「日本の穴」がインドネシア政府によって史跡に認定された直後、壕の入口の壁に残虐を示唆するレリーフが描かれたが、一九九七年一月、日本とインドネシアの関係者の努力と英断によってすべてのレリー





時計台最上部から  
ブキツ・ティンギ  
の街を眼下に望む

フは撤去された。オランダの公式文書も虐殺を否定する元インドネシア義勇軍兵士の証言を載せている（日蘭戦時資料保存委員会著。二〇〇四年二月発行）。

日本側とインドネシア側の認識にズレがあるようだ。市観光局は史跡として一層の観光促進を図りたい意向で、逆に詳しい地下壕の設計築造図の入手を求められた。日本側の証言がインドネシア側を納得させたとは思えない。今でも市観光局の観光案内には「何千人もの人々が強制労働させられ、多くの犠牲が払われた」と記載され、現地ガイドは、地下壕内で相変わらず国内外の観光客に語り続けている。

前回下からその姿を見上げるだけだった時計台塔内を視たい一心で関係官庁を訪ね、許可を得た。狭い梯子段をひやひやしながら最上部まで上った。二六メートルの高さからブキツ・ティンギの街を三六〇度の角度からぐるり望むと、一七年間の町並みの変遷が目映った。

今まで時計台はオランダの築造だと思っていた。当地在任書記官が本国のオランダ女王から賜った大時計を据える塔を街の建築技師やジットと同僚のギギ・アメツに依頼し、三〇〇〇グルデンの費用をかけて一九二六年完成した。大時計は一八二七年オランダ製造で、振り子は重さ二〇〇キログラム、ガラス製の外縁、釣鐘は真鍮製。大時計の機械システムは当時のままで、現在も常時二名の市職員が担っている。塔は



ブキッ・ティンギの街に  
馬車が行き交う

地元産出の石灰と卵の白身を混ぜた漆喰造り。鉄骨鉄筋無しでも、西スマトラ大地震にも耐え、無傷だった。ただジャティ材の秒針の支えだけが割れ、取り替えたそう。一八〇年もの間時を刻んできたオランダの製造技術とミナガバウの建築技師の技に驚愕する以上に地元の維持管理に感服。

時計台には面白い逸話がある。当時時計台が完成したものの地元の人々は時刻を知る術を知らず、時計が時刻を示すものだと知らなかった。まして文字盤のローマ数字は読めない。唯一時刻を知る手がかりは明け方の鶏の鳴き声だった。そこで塔のてっぺんに鶏の彫像を据えた。現在も三〇分と一時間毎に鐘の音が高らかに街に響き渡る。

最初時計台の最上部には白亜のドーム屋根型洋風家屋が載っていたが、一九四二年日本軍占領時にミニ神社に取り替えられた。その後インドネシア独立宣言後に西スマラのミナガバウ民族文化の象徴である水牛の角の形をした伝統家屋に取り替えられた。塔の色も当初のグレーから白色になり、そして二〇〇八年インドネシア民族覚醒一〇〇年を記念して白と水色のツートンカラーに変わった。時を刻みながら時代の移り変わりを凝視し、マグニチュード七・二の大地震にも耐え抜いたジャム・ガダンは明日への希望を導く象徴のようだ。

(おおつ のぶこ／フリーランスライター&コーディネーター)